

2023 ズバリ! 的中



古文

京都大学

本文の一部がズバリ的中 設問も2つの中

入試問題

前期日程 文系学部
三 問一、問三

河合塾

高3 II期
高3ONE WEX京大国語テスト
第五講 問二、問三

三

次の文を読んで、後の問に答えよ。(50点)

冬もやうやうふかくなりにけるに、暮れ行く空のけしきすまじく、雪もちらちら打ちしりしが、とかくする程に、日もすてに暮れはてて、鳥羽玉の團たまごさへいとどうとまし。かくて夜もふけ行くままだに、夜さむ身にしみわたり、しばしもいねやうで、丑みつばかりになりぬるに、鐘のこゑもきこえず、鶯の音もせで、なにとなくしつかになるやうに寛あましが、いつあくるともなく、窓のしらみあひける程に、家うちにありしわらははよびおこして、閨まへの戸あけさせれば、夜のまに雪ゆきいとおもしろうふりつみて、庭の草木も花さき、にはかに春来るころし、四の山の端もみな白妙しらたふになりて、人間世界、さながら天上の白玉京しらたまぎとあやまるる折しも、あたりちかき池の水鳥のこゑさるになくも、程なればさゆ。さこそ波のうさむからめと、それさへ哀れを添へて、さても心あらん友もがなと、人ゆかり思ひし折ふし、いつも問ひかはす人のものとよりとて、文もて来ぬ。いそぎ開きて見れば、「めづらしき雪に待てる。いかが見給なやらん。さてはご雪に、御起きふしも寤あま来なく思ひ侍る」とおんかきけるにつけて、かの兼好が「雪のいとおもしろう降りたりしあした、人のがりがいふべき事ありて文やるとて、雪の事なともいはざりしに、この雪ゆきいかが見ると、筆ふでいはぬとて、口惜くしき事といひこせし事をふと思ひ出で、是こゝはあなたよりかく氣をつけていひこせしを、こなたより返事なくば、うらみやせんと思ひしままに、使ひしはしました返事がきて奥に。」

空にふる雪はこすゑの花なれやちるかさくかどあやまたれける

とかき、「あてむきはひとへにさびくへらし侍る。思ふどちひあはせてこられよかし。それこそ誠の志と思ふべけれ」といひやりけり。かくてやや日たくる程になりて、門をたたく音しけり。人してあきすれば、かの文ふみをせし人、例の人々伴なひて来にけり。形のごとく主設けて、翁おきなうれしく、さむさ忘れてにじり出で、かたみに語りあひしが、酒さけ燗あつめて出だしけるに、衆客もみな酔をすすめて、清談せいだんいとこころよく見えし。翁。

あるじする心ばかりはこゆるぎのいそぎありくにおとらめや君

「われら事、足ら侍らねば、御ご為なに再またもとめてありくこはかなひ侍らねども、心ばかりはそれにもおとり申し候ふまじ」

次の文は、江戸時代の儒学者が記したもので、ある雪の朝、筆者（翁）が友人から届いた手紙に返事を書く場面からはじまる。これを読んで、後の問に答えよ。

使ひしは侍たせて返事書きて、奥に、

空に降る雪はこすゑの花なれや散るか咲くかどあやまたれける

と書きて、さて、「今日はひとへにさびしく暮らし侍る。思ふどち言ひあはせて来られよかし。それこそ誠の志と思ふべけれ」と言ひやりけり。

かくてやや日たくる程になりて、門をたたく音しけり。人して開けさせれば、かの文ふみをせし人、例の人々ともなひて来にけり。形のごとくあるじまうけして、翁おきなうれしく、寒さ忘れてにじり出で、かたみに語りあひしが、酒さけあたたためて出だしけるに、衆客もみな酔よひをすすめて、清談せいだんいとこころよく見えし。翁。

「A あるじする心ばかりはこゆるぎのいそぎありくにおとらめや君

われら事、足立ち侍らねば、御ごために有ありてありくことはかなひ侍らねども、心ばかりはそれにもおとり申し候ふまじ」と戯はれごとなど言ひて程を経けるに、衆客、「今日の雪には、翁の漢詩わんしなくてやはあるべき」とて、翁に簡たんを授けしに、翁、「いやとよ、昔は雪月花の折にあへば、

はや詩の思ひ寄りも候ひしが、今は老いはれてその心も候はず。詩も久しく捨てて作らねば、口しぶりて言ひ出だすべきこともおぼえず。されど今日の御尋ね忘れがたく侍るまに、いかさまにも申してこそみめ」とて、しばしち案じて、

「家住駿台下 門臨万里流
 隠雲平野樹 棹雪遠江舟
 吾老愧安道 客来皆子猷
 草堂偏閑寂 喜共故人遊」

もとより翁が家は、地高く長流に俯し候へども、門は流れに臨まず候ふ。しかるに今の詩に門臨万里流と言へるは、そこに近く候へども、言葉続きよく、句勢あるやうにと思ふより、かく申すにて候ふ。されば詩は言葉になづみて心ならず不実になり候ふ故に、古より篤実なる人は、多くは詩を好まぬもことわりにて候ふ。ただし、これ程のことは、詩には許し申すにてもあるべし候ふ。常の言語にこのくせ出だし申さぬやうに心得べきことにて候ふ。

(室鳩巢「駿台雑話」より)

と、戯れことなどいひて程を経けるに、衆客「けふの雪には、翁のから歌なくてやはあるべきとて、翁に簡を授けしに、翁「いやとよ、むかしは雪月花の折にあへば、はや詩の思ひよりも候ひしが、今は老いはれて其の心もさぶらはず。詩も久しく捨てて作らねば、口洪りていひ出づべき事も覺えず。されどけふの御たづね忘れがたく侍るまに、いかさまにも申してこそみめ」とて、しばし打案して、

(5) 家住、駿台下、門臨、万里流、隠雲、平野、樹、棹、雪、遠江、舟、
 吾老、愧、安道、客来、皆子猷、草堂、偏、閑寂、喜、共、故人、遊、

(室鳩巢「駿台雑話」より)

注(*)

天上の白玉京 天上世界の白玉の樓閣
 こゆるぎの 相模国にある小余綾の織に由来する枕詞で「いそぎ」にかかる。
 われら ここでは複数ではなく、自分一人のことをいう。
 足たち侍らねば 老齢で足腰が弱っていることをいう。
 簡を授けし ここでは漢詩を依頼したことをいう。
 駿台 江戸の駿河台。
 閑寂 静まりかえってさびしいさま。

注(*)

こせしよこした。
 こゆるぎの「いそぎ」にかかる枕詞。相模国の地名「こゆるぎのいそぎ」による。
 簡 紙。
 駿台 駿河台の略称。江戸市中の台地で、神田川の南に広がる。
 棹 ここでは「さざす」と読む。名詞の「棹」は水底を突いて舟を進める長い棒のこと。
 安道 魏の字。中国の東晋の人で、書・画・琴をはじめとして諸芸に優れた風流人であった。
 子猷 王徽之の字。中国の東晋の人で、書道に優れた風流人であった。雪の夜、友人の安道を訪ねた故事が有名。
 閑寂 ひっそりとして寂しいさま。

問一 傍線部(1)を現代語訳せよ。

問二 和歌Aを、歌意が明らかになるように、ことばを補って現代語訳せよ。

問三 傍線部(2)について、筆者はどのようなことを言っているのか、説明せよ。

問四 波線部を現代語訳せよ。

問一 傍線部(1)(3)を、適宜ことばを補いつつ、それぞれ現代語訳せよ。

問二 傍線部(2)はどのような意味か、直前の兼好『徒然草』の挿話にも触れながら説明せよ。

問三 傍線部(4)はどのような意味か、この考えに至る経緯を含めて説明せよ。

問四 傍線部(5)の安道は戴安道、子猷は王子猷、ともに中国東晋の人である。雪の夜に出た目をともに愛でるため、子猷ははるばる安道を訪ねたという故事がある。これを踏まえ、傍線部の意味を説明せよ。